

# 床滑遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1991

茅野市教育委員会

## はじめに

茅野市の北山地区は、国史跡の上之段遺跡の縄文時代晩期をはじめ、縄文時代前期の神ノ木遺跡、高風呂遺跡、下島遺跡など、縄文時代中期の遺跡の多い茅野市にあっては珍しい時期の遺跡が多く、また注目されている遺跡の多い地区でもあります。このような地区でもあるので、今回の県営圃場整備事業の実施にあたって、特に今までの縄文時代遺跡とは異なる遺跡立地をもつ場所であっても注意を払って調査を進めているところであります。

今回の床滑遺跡の発掘では縄文時代と考えられる陥し穴が発見され、縄文時代の人々の活動の一端を垣間見ることができました。これらの陥し穴をつくった人々がどこに住み、なにを捕ろうとしていたのか考えると興味が尽きません。

今後さまざまな性格の遺跡の調査が行われる予定ですが、数千年の昔の生活を少しでも正確に再現していきたいものです。

最後になりましたが、発掘調査に協力いただいた地産者はじめ関係者の皆さん、参加された皆さんに心から感謝いたします。

茅野市教育長  
両角 昭二

## 例 言

1. 本書は、長野県茅野市北山芦ヶ沢地区の県営圃場整備事業に伴う床滑遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫及び県費の補助を受け、茅野市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成3年9月3日から9月10日まで行った。
4. 発掘調査における記録及び整理は、下記の調査員及び調査補助員が行った。
5. 出土品・諸記録は、茅野市教育委員会文化財調査室で保管している。
6. 本書の原稿執筆は、調査員の小池岳史と小林深志が協議し、共同して行った。

### 発掘調査関係者名簿（文化財調査室）

室 長 長田 篤

係 長 鶴飼 幸雄

主 任 両角 一夫

調査員 守矢 昌文、小林深志、功刀 司、小池岳史、伊東みゆき（嘱託）、百瀬 一郎（臨時）

調査補助員 武居八千代、占部美恵

発掘参加者 牛山市弥、牛山徳博、堀内潭、牛山静子、伊藤千代美、赤堀彰子

## 第I章 遺跡の位置

茅野市の市街地から麦草峠を経て八千穂村に抜ける幹線に国道 299号線があるが、その国道 299号線が北山糸萱区の東で渋川を渡り、台地へ上り詰めた一帯の畑に本遺跡は位置する。所在は茅野市北山岸ヶ沢床滑で、遺跡脇の国道 299号線を数百m上ると、蓼科中央高原に至る。発掘調査を実施した9月初旬には車の往来はまばらであったが、シーズン時には白樺湖・大門峠を経て上田市に至る県道茅野・上田線とともに観光客の入り込みの激しい場所である。

床滑遺跡の所在する北山地区には昭和17年に国史跡に指定された上之段遺跡をはじめ、高風呂遺跡、神ノ木遺跡、下島遺跡と様々な時期の縄文時代遺跡が分布している。遺跡の標高は1,100mを測り、当地方の縄文時代遺跡としては、高所に位置している。古くから縄文時代前期・中期の土器片や石鏡が採集されており、以前は床並との名称を用いることもあったが、茅野市で編纂した「茅野市子名地図」に床滑との記載があり、これを遺跡名とすることとした。

## 第II章 調査の方法と経過

今回発掘調査の対象となったのは、台地の先端部にあたる1,800㎡である。台地南西側は重機により一部削り取られ、北側は渋川に注ぐ小溪流に浸食されており、10m程の崖になっている。1991.09.03(火)晴れ

重機を用いてトレンチによる試掘調査を行う。トレンチは台地に直交する形で南北方向に東をAトレンチとし、アルファベット順にKトレンチまで計11本のトレンチを開け、遺構の有無を確認し、必要に応じてトレンチを拡張する方法をとった。トレンチの幅は約1.5～2mで、4m間隔で開けていったが、農作物が残っており、等間隔にトレンチを開けることはできなかった。

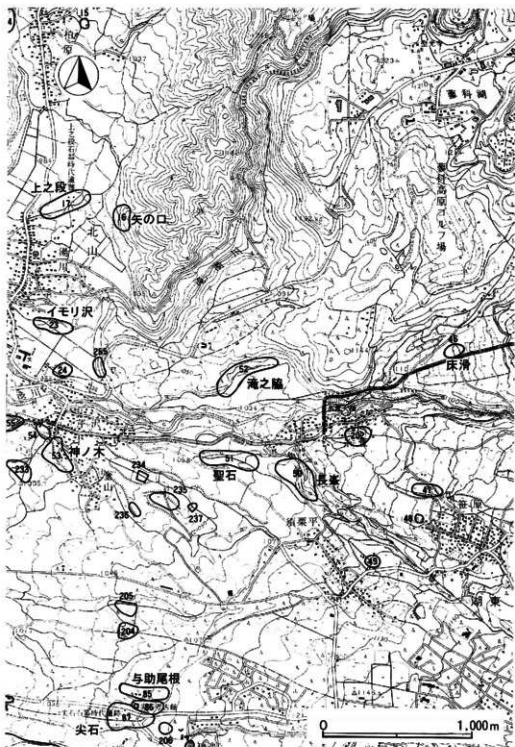
試掘調査の結果、Fトレンチで2基、Iトレンチで1基の計3基の土坑を確認することができた。また、Iトレンチで検出された土坑(1号土坑)を長軸に沿って半載し、陥し穴であることを確認した。

1991.09.09(月)曇り時々小雨

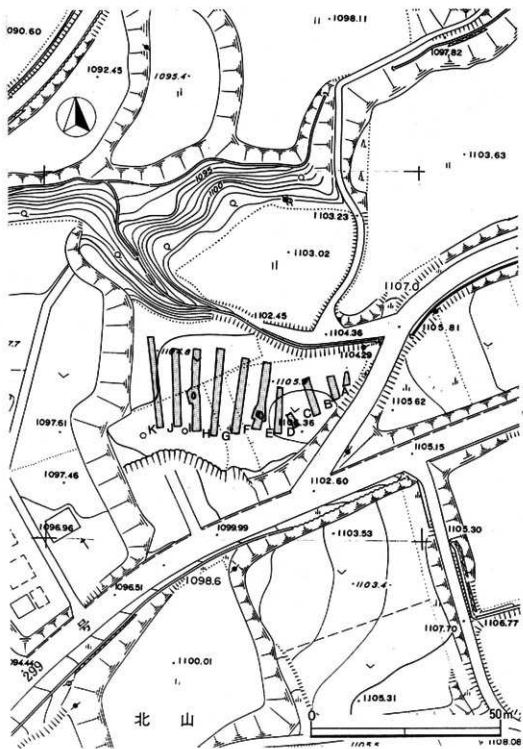
1号土坑は土層断面図作成の後、完掘。エレベーション図の作成も終了する。

2号土坑・3号土坑は、重複しており、平面観察により、東側の2号土坑が新しいことが明らかであったため、2号土坑から掘り下げを開始する。上層観察は図上で2つの土坑の新旧関係が分るように、3号土坑に掛るように1本と、土坑の中心を通るよう短軸方向に1本の計2本を観ることとした。土層断面図作成終了後2号土坑を完掘し、先に2号土坑で図化した南側の土層断面図に合せて3号土坑の半載を行い、上層断面図の作成を行う。

1991.09.10(火)晴れ



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



第2図 地形の発掘区域 (1/1,000)

1号土坑は前日作成した十層断面図に坑底ピットを書き加える。その後完掘状態の写真を南と西から撮影し、終了する。

3号土坑は土層断面の写真を撮影後、残り兩半分の掘り下げを行う。坑底ピットを掘り上げた後、完掘状態の写真撮影を行い、エレベーション図の作成を行う。2号土坑の坑底ピットとともに平面図を作成する。

2号土坑は坑底ピットを掘り下げ、3号土坑とともに写真撮影を行った後、平面図に坑底ピットを書き加える。坑底ピットに掛るようにエレベーション図を作成し、作業を終了する。

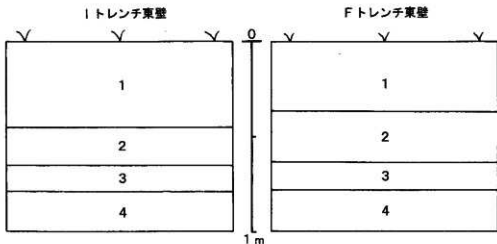
本遺跡の調査対象面積は1,800㎡であったが、その内トレンチによって調査を行った面積は16%にあたる290㎡であった。

### 第三章 遺跡の層序

本遺跡の層序は、耕作土である表土層以下、遺物包含層、ローム漸移層、ローム層と続く。遺物包含層とした黒褐色土は、本遺跡で遺物の出土が黒曜石片が数点と極めて少なかったため、厳密には遺物包含層とは言えないかもしれない。

柱状図は1号土坑の検出されたIトレンチ東壁と2・3号土坑の検出されたFトレンチ東壁を明示したが、地表面からローム漸移層までの深さはどちらも約80cmと同じであるが、台地の先端に近いIトレンチの表土層が浅く、遺物包含層が逆に深いことが理解される。

- 1層 表土層（耕作土層） 粒子は細かく、締りはない、また、粘性に乏しい。ローム粒子・ロームブロックをほとんど含まない。炭化物はなく、礫は上部に1cm大のものが見られる。
- 2層 黒褐色土（遺物包含層） 粒子は細かく、締っているが、粘性はない。ローム粒子は1mm以下で少ない。ロームブロックは2mm～1.5cmで、量は少ない。2mm程の炭化物を稀に含み、



第3図 遺跡の層序 (1/20)

3mm大の礫を少量含む。黒色上が斑状に見られる。

3層 黄褐色土（ローム漸移層） 粒子は細かく、締りもあり、粘性もある。ローム粒子は1mm以下で多い。ロームブロックは2cm～3mmで多い。炭化物の混入はなく、稀に2mm大の礫を含む。

4層 ローム層

## 第IV章 遺 構

本遺跡で検出された遺構は、土坑が3基で、いずれも陥穴十坑と考えられる。

### 1. 1号土坑（第4図、図版2-1）

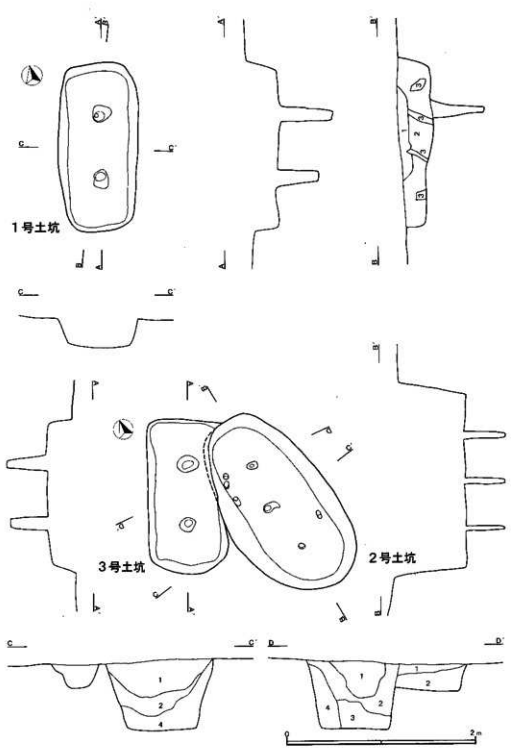
Iトレンチに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径178cm、短径84cmを測る。底面形態も隅丸長方形で、長径164cm、短径63cmを測る。坑底までの深さは約30cmと浅いが、遺構確認面がローム面で、ローム漸移層を約15cm削っているため、深さは45cm以上あり、断面形態は鉢状になっていたと考えられる。長軸方向はN10°Eを指す。覆土は3層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子の混入は極めて少なく、1mm程度である。ロームブロックは3mm程度のものが稀に入る。また、2mm程度の炭化物が稀に入る。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。ローム粒子の混入は少ないが、1層より多く、大きさは1mm以下である。ロームブロックは3mm～1cm程度のものが稀に入る。炭化物の混入はないが、1cmほどの礫が数個みられた。3層は黒褐色土で、坑底ピットの確認前は、柱痕になるのではないかと思われたが、ピットと配置がずれていた。粒子は細かく、締りはやや弱く、粘性もない。ローム粒子の混入は少なく、大きさも1mm以下である。ロームブロックも稀に入るが、大きさは3mm～1.5cmである。炭化物・礫の混入はみられない。1・2層は共に硬くよく締っている。

坑底には長軸方向に2個のピットが並ぶ。北側のピットは径21×18cm、深さ55cmを測る。南側のピットは径20×15cm、深さ44cmを測る。本遺構はその形態から2個の坑底ピットをもつ陥穴十坑と考えられる。

遺物は黒曜石核1点、剥片4点が出土している。

### 2. 2号土坑（第4図、図版2-2）

Fトレンチに位置する。遺構検出時において後述の3号土坑と重複しており、本遺構が新しいことが確認されている。平面形態は楕円形を呈し、長径207cm、短径114cmを測る。底面形態も楕円形を呈し、長径185cm、短径74cmを測る。坑底までの深さは73cmを測るが、周辺のローム漸移層の深さが約15cmであることから深さ88cm以上の鉢状の断面形を呈する土坑であったと考えられる。長軸方向はN13°Wを指す。覆土は4層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締っているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む。5mmほどのロームブ



第4圖 土坑 (1/40)



ロックを斑状に入る暗褐色土の中を含むが、量は少ない。炭化物・礫の混入はみられない。2層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締まっているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含むが1層より多く、ロームブロックも大きさが7mmほどで、1層より多い。炭化物の混入はみられないが、3mmほどの礫が稀にみられる。3層は黒褐色土。1層とはほぼ同じであるが、1層のロームブロックが5mmほどの大きさなのに比して、本層は5mm～1cmと大きい。4層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締っており、粘性も1・2層に比してある。1mm以下のローム粒子を多く含む、ロームブロックも5mmほどの大きさを中心に、3cmほどのものも見受けられる。炭化物・礫の混入はみられない。

坑底からは大小7個のピットが検出された。北側のピットは径12×8cm、深さ44cmを測る。中央のピットは径16×7cmで、深さ42cmを測る。南側のピットは径7×5cmで、深さ41cmを測る。中央のピットは検出時には2個のピットが確認されていたが、ピットを掘り下げていくと間のロームが貼ったもので連結した。他の4個のピットは深さが7～8cmと浅く、規模も小さい。中央の3個のピットと覆土に違いはみられなかったが、本土坑に伴う付属施設であるか疑問が残る。

遺物の出土はなかった。

### 3. 3号土坑（第4図、図版3-1）

Fトレンチに位置する。遺構検出時において前述の2号土坑と重複しており、本遺構が古いことが確認されている。平面形態は隅丸長方形を呈し、長径162cm、短径82cmを測る。底面形態も隅丸長方形で、長径149cm、短径68cmを測る。坑底までの深さは約28cmと浅いが、遺構確認面がローム面で、ローム漸移層を約15cm削っているため、深さは43cm以上あり、断面形態は鉢状になっていたと考えられる。長軸方向はN23° Eを指す。覆土は2層に分層が可能である。1層は黒褐色土で、粒子は細かく、よく締まっているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子を少量含む、3mm程のロームブロックを稀に含む。炭化物の混入はみられないが、3mm程の小礫を数個含む。2層は暗褐色土で、粒子は細かく、よく締まっているが、粘性はない。1mm以下のローム粒子と、5mm大のロームブロックを少量含む。炭化物・礫の混入はみられない。

坑底には長軸方向に2個のピットが並ぶ。北側のピットは径22×17cm、深さ41cmを測る。南側のピットは径16×14cm、深さ38cmを測る。本遺構はその形態から2個の坑底ピットをもつ陥し穴土坑と考えられる。

遺物の出土はなかった。

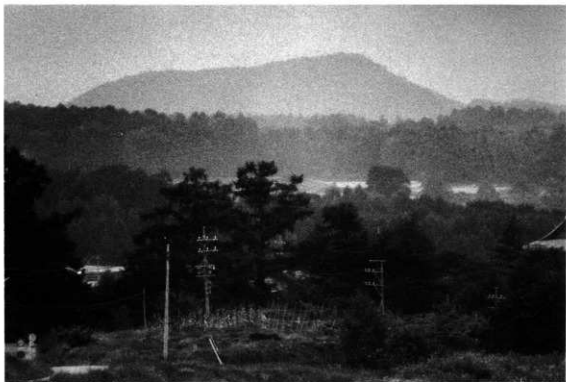
## 第V章 ま と め

本遺跡で検出された遺構は、上坑が3基検出されただけであった。そのすべてが陥し穴土坑と考えられるものである。

1号上坑と3号上坑は形態や規模がほぼ同じで、主軸方向もほぼ同じであることから同時期と考えて差し支えないものと考えられる。陥し穴土坑の分布については2基の間隔が約18mを測るが、昨年度調査した上見遺跡では陥し穴土坑の間隔が約3mで幾つかの土坑が連続して並んでいることが確認されているので、本遺跡にも更に幾つかの同時期の陥し穴土坑があったのではないかと考えられる。また、陥し穴土坑の配列については、前述の上見遺跡で長軸方向に並列し、尾根に添って並ぶことが確認されているが、今回もほぼ同じ結果が得られた。陥し穴の形態は上見遺跡が楕円形で坑底ピットが中央に1つなのに対して、本遺跡では形態が隅丸長方形で、坑底ピットが2つである等、異なる点が多いが、陥し穴の性格上同様な配列になるのではないかと考えられる。坑底ピットを2個有する陥し穴土坑は茅野市内ではよせの台遺跡で2基、占田城跡で1基、棚畑遺跡で1基、阿久尻遺跡で2基（未報告）の6基だけであるが、本遺跡で2基の類例を加えたことになる。

2号上坑も陥し穴と考えられる土坑であるが、本遺跡では同タイプの土坑は本遺構が1基確認されただけである。本遺跡の調査がトレンチ調査で未発掘範囲が全体の4/5と多いため、更に幾つか同様の陥し穴土坑が存在した可能性もあるが、今となっては知る術も無い。この陥し穴土坑も他の2基とは若干長軸方向が異なるものと同じ様に等高線に平行に走っている。3号上坑との重複関係から2号土坑が新しいと考えられるが、時間差については明らかに出来ない。

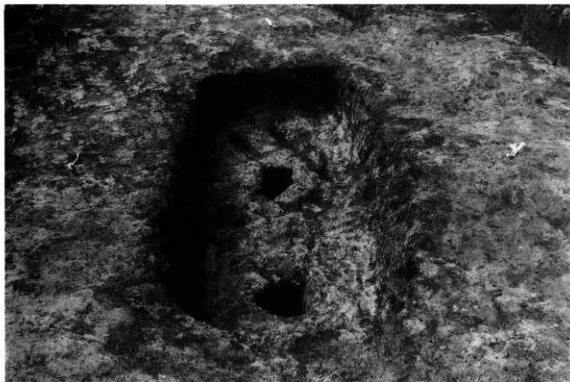
茅野市の遺跡発掘も今まで行われていた集落遺跡の調査以外にも昨年の上見遺跡、今年の床滑遺跡と住居址を伴わない遺跡の調査が増加してきた。原始・古代の文化を解明するうえでは集落遺跡の調査だけでは不十分なことは今更述べるまでもなく明らかであるが、開発が大集落を営める適地ばかりでなく、陥し穴土坑のような遺構しかない以前からの人の住んだ痕跡のない場所へも及んできている証拠でもある。今後、更にこういった遺跡の調査が増加していくものと思われるが、遺跡の認定・調査の方法の研究とともに我々が行わなければならないのはこの様な遺跡の重要性を一般の人々にアピールしていくことではないかと思われる。



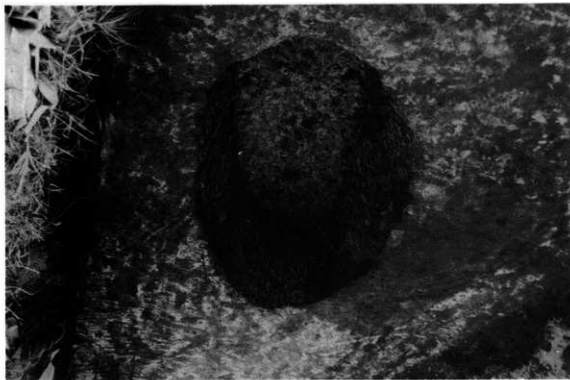
1. 遺跡遠景



2. 2・3号土坑検出状況



1. 1号土坑



2. 2号土坑



1. 3号土坑(右)



2. 実測風景

---

# 床滑遺跡

—— 県営園藝整備事業に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 ——

---

平成3年12月20日 発行

編集 長野県茅野市塚原2丁目6番地1号

発行 茅野市教育委員会

印刷 茅野プリント

---

